

ささいな恐怖

穴神（あながみ）様



GIMA

「じーじ、あの声はなんな？」

「今晚は喰祭（じきさい）じゃけえ、穴神様が鳴きよるわあ」



1. 寺社めぐりの高橋くん

今年24歳になるフリーターの高橋くんの趣味は、神社仏閣めぐりだ。

いささか抹茶（まっこう）臭いが、高橋くんは取り立てて信仰心があついわけではない。

高橋くんが好んで回るのは、オカルト色の強い神社仏閣ばかりなのだ。

だから、関東で言えば「将門の首塚」や「お岩稲荷」などは押さえているし、東北では「恐山」、関西では「高野山」はもちろん訪問済みだ。

そんな高橋くんであるから、時間が自由になりやすいフリーター稼業がやめられない。

半年ほどバイトしてお金を貯めた高橋くんは、今回、瀬戸内地方の寺社めぐりにやってきた。

瀬戸内には平家ゆかりの神社仏閣が数多く存在している。

神社好きのオカルトマニアにはこたえられない地方だ。

午後3時、「忌宮神社」や「赤間神宮」などの有名どころを回った高橋くんは、小さな港にいた。

もう少し穴場的な神社を回るか、街に出て安宿にチェックインするか、高橋くんは迷っていた。

それが、道に迷っているように見えたのか、高橋くんの背後から声かけられた。

「どこかお探しですか？」

振り向くと、70をいくつかすぎたぐらいの老人が立っていた。

「いやあ、探していると言いますか、その」

と、高橋くんは寺社めぐりをしていることや穴場的な神社を探していることなどを話した。

そんな高橋くんの趣味が珍しかったのか、老人は笑いながら言った。

「若いのに信心深いことで、よろしいですな」

いや別に信心深いわけでは……と、高橋くんは言いかけたが、説明が面倒なので、やめた。

「珍しい神社なら、うちの島にもありますがな」

ふと思い出したように、老人が言った。

「うちの島？」

「じゃ。ここから船で、そう30分ほどのところの、小さい島ですがな。変わった神社がありま

すで。わしはその島のもんですわ」

老人は海の方を指さして言った。

「変わった神社というのは、どういう……？」

「小さな神社ですがな。洞窟がありまして、そこに『穴神様』をお祀りしておりますで」

「『穴神様』……」

高橋くんは首をかしげた。

洞窟がらみの神様と言えば「天の岩戸」の前で舞った「アメノウズメノミコト」が有名どころだが、そういうのとも違うようだ。

老人の説明では今ひとつ要領がつかめなかったが、高橋くんは大いにそそられた。

「定期船か何かありますか？ ぜひ見てみたいです」

高橋くんが言うと、老人は目を丸くした。

「これからですかの？ 何かご予定があるのでは」

「いえ、今はフリーターですので、いくらでも自由はききますし。どこに泊まるかも決めていないので、どうにでもなります」

「おうちの方が心配されるのでは」

「一人暮らしなんで、それも問題なしです。——あ、もしや部外者には見せられない？」

「いやいや、そういうわけではないんですがの。……だば、こちらへ」

そう言って、老人は先に立って歩き出した。

船が係留されている岸壁に沿ってしばらく歩いて、老人は一艘の漁船の前で立ち止まった。

「留（とめ）さん」

老人が声をかけると、ロープを巻いていた漁船の持ち主が顔を上げた。

老人と同年配ぐらいであった。

「小さいもんで、うちの島には定期船がありませんでの。留さんの船で送り迎えしてもらおうです」

「源さん、そちらは？」

留さんと呼ばれた老人が、甲板の上から声をかけた。

源さんというのが、高橋くんを案内した老人の名なのだろう。源太とか、源治郎とか。

「お客さんだわ。港でたまたまお会いしての。うちの『穴神様』を見たいんだと」

「『穴神様』を？ そりゃ珍しいの。奇特な人だわ。——で？ お連れすればいいんかの？」

「じゃあじゃあ。わしももう帰るところだて。頼むわ。さあ、お客人」

老人にうながされ、高橋くんはおっかなびっくり漁船に乗り込んだ。

魚の臭いが鼻につく。

続いて老人が乗り込むと、留さんと呼ばれた老人は、すぐにエンジンを始動した。

2. 小さな島の小さな神社

老人——源さん——の言葉通り、島へは30分足らずで着いた。

なるほど小さい。

小さな山をぽんと海に浮かべた、といった感じだ。

島は海岸線からすぐに傾斜が始まっていて、道路らしい物は海岸線と平行に走っている道だけで、それにしたところで、コンクリート舗装の1.5車線幅程度の道だった。

いったい、何世帯が住んでいるんだろ。

港から島を見上げた高橋くんは思った。

この雰囲気では、駐在所や役場などの行政機関もないだろうな。

港の栈橋に、石碑のような物が立っているのに、高橋くんは気づいた。

「狗斗瑠島」

石碑にはそう彫り込んであった。

読めない。

源さんに読み方を訊こうと思ったが、すでに源さんは先に歩き出していた。

高橋くんはあわててその後を追った。

源さんに案内され、高橋くんは島の世話役の家に向かった。

村長という役職名でないのは、行政エリアである「**村」というのが、この島だけを指しているわけではないからだ。

実質的には、その人がこの島のトップということだ。

世話役（この人もまた、源さんぐらいの老人だった）は突然訪問した高橋くんを見て驚いたが、源さんから話を聞くなり、大歓迎した。

「こんなへんぴなうちの島に若いお客人がくるのは、滅多にないことです。今日はぜひ、泊まっていきんさい」

世話役がそんなことまで言い出したので、高橋くんは面食らった。

「いえ。いくら何でも、そこまでしていただくのは、ちょっと」

高橋くんはそう言ったが、世話役は取り合わなかった。

地方のご老人にはありがちな強引さである。

好意には違いないのだ。

やむなく、高橋くんは甘えることにした。

「……あの、それはともかく、『穴神様』というのを拝見したいのですが」

高橋くんが言うと、世話役は思い出したように立ち上がった。

「おお。そうでしたな、失礼しました。ではさっそく行きますか。なに、すぐですわ」

地方の人が言う「すぐ」は、都会育ちの人間にはあてにはならない。

そう思った高橋くんだったが、意外にも「穴神様」は思っていたよりは近かった。

それでも、世話役の家を出て15分ちょっと、傾斜の続く道を登るのはちょっと疲れた。

灌木の中を歩いていると、やがて赤く塗られた小さな鳥居が見え、それをくぐると、ぱっと視界が開けた。

そこは広場のようになっていて、地面が平らにならされていた。

鳥居の反対側、広場を挟んで相對する場所に、小さな社があった。

「ほおー」

思わず高橋くんは声を上げていた。

悪くない。

地方の、それも過疎もいいところの小さな島にある神社にしては、よく手入れされていると言
っていいだろう。

これに似た雰囲気神社と言うと……

高橋くんは記憶を探った。

京都の「貴船」だな。奥の院の方。

社の背後は、また山になっていて、社は崖面に背中を付けるような形で置かれている。

要するに、山の中腹にむりやり広場を作ったような印象を受ける。

「あれが『穴神様』ですわ」

世話役が言って、社に向かって歩き出した。

高橋くんも続く。

社は、それほど手の込んだ造作ではなかった。

おそらくは船大工が作ったのだろう。

社の前には、小さな賽銭箱。

高橋くんは小銭を投入し、柏手を打った。

顔を上げる。

そこで、高橋くんは社の背後にある物に気づいた。

社の背後をのぞき込む。

「気が付かれましたか」

世話役が笑った。

社はただ崖面にぴったりと押しつけられて置かれていたのではなかった。

「洞窟……」

社の背後には、大人が少し腰をかがめて入れる程度の高さの、小さな洞窟があった。

「ああ！」

高橋くんは顔を上げ、世話役を振り返った。

「洞窟というか、穴。——だから『穴神様』というわけですか」

「そういうことですな」

「すると、ご神体はあの中ということですか」

高橋くんが言うと、世話役は首をかしげた。

「さあて。そのあたりがはっきりしませんでなあ。穴の奥が奥の院とも言えるし、穴そのものがご神体とも言われたり——そもそも文献などはありませんのでなあ」

「みなさんは、どういう想いでお祀りしているんでしょう？ ええと、その——ご利益とか」

「ああ、それははっきりしとりますよ。豊漁祈願ですな。年1回、豊漁を願って『穴神様』に供物を捧げてお祈りしますです。うちらでは『じきさい』と言うとります」

「『じきさい』？」

「喰べる、祭り、と書きますな。昔は豊漁がそのまま島民の食生活に直結しておりましたで、そういう名前になったんでしょうな」

「あの中には入れるんでしょうか」

高橋くんが訊くと、世話役は一瞬ためらってから、言った。

「入れます。中は何もありませんがの。——ご覧になっていただきたいところですが、中は島のもんしか入れん決まりになっとりますで。こらえてやってください」

「いえ。もしできればと思っただけで。ありがとうございました」

「それでは戻りますかの」

3. 「穴神様」へ

たまたまやってきた客に、ここまで豪華な晩餐を出すものだろうか。

目の前に並べられた夕飯を前に、高橋くんは思った。

高級食材の山というわけではないが、地元産の食材がていねいに調理されている。

「さあさあ。遠慮なく。どんどん食べんさい」

「どんどん飲めんさい」

異常に思えるほど親切に酒や食べ物をすすめる世話役や源さんが、気味悪くすら感じる。

もともとあまり飲まない高橋くんだが、今回は特に、ほとんど飲まなかった。酔うと、今夜の行動にさしつかえるからだ……

目覚ましは振動モードにセットしておいた。

気づかれると面倒だ。

午前1時。

ここは田舎だ。もうみんな深い眠りについているだろう。

高橋くんは手早く準備を整え、そっと部屋を出た。

世話役の家を出て十分距離を取ってから、白色LEDのヘッドランプを装着した。

今回のように洞窟探検をする場合に備え、常備している。

深夜で真っ暗な分、「穴神様」までは時間がかかった。

昼間に見た赤い鳥居を過ぎ、広場に出た高橋くんは、思わず小さく声を上げた。

広場には、例の社を取り囲むように、かがり火が置かれていた。

かがり火の高さは1メートル程度。廃材がパチパチと音を立てながら、赤々と燃えている。

昼間来たときは、かがり火の台すらなかった。

用意されて、あまり時間がたっていないように思える。

「『じきさい』……か？」

昼間の世話役の言葉を思い出した。

だが、世話役は今日がそうだとは、一言も言わなかった。

第一、ここには誰もいない。

奇妙だ。

だが、ここまで来て「穴神様」を見ないわけには行かない。

高橋くんは社を動かし、洞窟の中に入っていった。

高橋くんが洞窟に入って行ってすぐ、鳥居の陰から数人の人影が現れた。

世話役、留さん、源さん、だった。

「たまげただな。自分から入っていった」

「今どきの若いもんの考えることはわからんな」

「まあまあ。手荒なことをせんですんだで、助かったわ」

3人は、高橋くんが入っていった洞窟の入り口に眼をやった。

その眼には、畏怖の色があった。

4. 「穴神様」についての考察

富士の風穴に比べたら、はるかに楽だな……

軽く腰をかがめて進みながら、高橋くんは思った。

富士山周辺にある風穴の中には、ぬかるみの中をはいずって進まなければならないようなところもある。

それとは比較にならない快適さだ。

洞窟は多少うねうねとしているが、おおむねまっすぐで、分かれ道などはない。

島にあるせいか、洞窟内にはかなりの湿気があった。

洞窟は、人一人がやっと通れるぐらいの直径だ。

両手を広げても、まっすぐには伸ばせない。

洞窟の壁は、意外にもつるんとしている。

岩でゴツゴツしていない。

潮のせいなのか、ねっとりとした手触りだ。

それと、生臭い臭い。

潮の香りとも違うように思う。

やがて、少し広い場所に出た。

いびつながら、直径が2 m余りのドーム状になっている。

ここならば、背を伸ばしても、頭が天井に当たることはない。

ヘッドランプで周りを照らしてみた感じでは、どうやらここで行き止まりらしい。

洞窟の入り口からここまで、ざっと20 mといったところだろうか。

——ここが一応、奥の院ということなんだろうな……

周辺を見回しながら、高橋くんは思った。

何かを祀るような祭壇などはない。

おそらく……

と高橋くんは考える。

おそらく、潮の満ち引きか何かの加減で、風が外に向かって吹いたり中に向かって吹いたりするんじゃないだろうか。

そこに神秘性や神性を見て、祀っているんだろう。

風の吹き方と潮の加減に何か関係があって、漁獲量に差が出るのかも知れない。

タブーの本質なんて、えてしてこういうものだよなあ。

それを否定するとかバカにするとかはしないけどさ。

そう考え、高橋くんは改めてドーム内を見渡した。

途中の通路と同様、この内壁も、手触りはつるんとしている。

つるんというか、ぬるっとした感触だ。

鍾乳石だろうか……？

あるいはどこからか海水がにじんでいるのだろうか。

いや、それはない。

海面からここまで、標高がけっこうある。

とすると、湧き水か。

その可能性が一番だろうな。

もっと量が湧けば「御神水」ということにできるんだらうけど。

もう一度、壁に触れてみる。

「ん？」

思わず声を上げた。

さっき触れたときよりもベタベタ感が増していないか？

気持ちが悪くて、ぬらつく手のひらをシャツでぬぐった。

そろそろ帰り頃か。

高橋くんは戻るべく振り返った。

洞窟がなかった。

「え？」

ここに入ってきた洞窟が見あたらない。

あわてて、ヘッドランプの光であたりを照らす。

このドームに出てきた、腰をかがめて歩いた通路。

それが消えている。

記憶していた場所は、すぼまったような模様の壁になっていた。

この模様は……強いて言えば、ケツの穴。

肛門だ。

「そんなバカな……」

納得しかねて、壁に触れてみる。

ぐによ。

そんな擬音がびったりくるような感触で、壁がへこんだ。

「わあっ！」

あわてて手を引いた。

手がさっきに増してべとべとになっている。

なんだなんだなんだ、なんなんだ、ここは。

周囲の壁からわき出る湧水の量が増えていた。

湧水？

いや違う。

これは、粘液だ。

さっきのようにシャツで「べとべと」をぬぐおうとして、違和感に気づいた。

ヘッドランプでは自分の身体を照らせないので、まさぐってみる。

シャツがぼろぼろになっている。

さっきべとべとをぬぐった部分が、腐食したようにぼろぼろになっている。

壁の手触りやしたたってくる粘液の異様さに気を取られて気づかなかったが、臭いも強くなっているだろうか。

何か、記憶にある臭いだ。

昔、新歓コンパで飲み過ぎて……

そう、ゲロの臭い。

というか……ペプシン。ペプシンと言えば胃……

いや！ いや！ いや！ そんなはずがない！ そんなバカなことが！

ここは、そう、一種の間歇泉なんだ。

定期的に、この奇妙な粘液を湧出する。

それと、この洞窟の先の空間という奇妙な構造によって、ここは神性を持って祀られているんだ。

この構造と、定期的な湧出と、強酸性の性質を持つ湧水と、それと、それと。

ええと、細い通路を抜けて広場に出る構造は、一般に「胎内めぐり」と称して。

けっこうあちこちの神社仏閣で見られて。

要するにこれは、再生と誕生をあらわして。

高橋くんは、知りうる限りの知識を総動員して、現在自分が置かれている状況を合理的に説明しようとした。

だが、高橋くんは、考えうる可能性の一つだけは、懸命に考えないようにした。

それでも、どうしても頭から離れない。

そして、高橋くん自身、それが真実であるだろうことが、うすうすわかっていた。

信じがたいことだが、ここが、巨大な生物の「胃」であるということ。

自分が、その生物に消化されつつあるということ。

つまり、「喰祭」というのは……

ドームの内壁が、うねうねと動いている。

すでに粘液は、足首までたまっている。

ここでようやく、高橋くんは悲鳴を上げた。

5. 喰祭の島

水平線が明るくなりかけている。

まもなく日が昇る。

世話役と源さんは港の岸壁に腰を下ろし、海を眺めていた。

遠く、低い汽笛のような音が響いている。

「穴神様が鳴きよるわあ」

たばこを吸いながら、源さんがぼつりと言った。

遠い昔、源さんがまだ幼い頃に祖父から聞いた言葉であった。

「ここしばらく、犬やヤギばかりだったから、穴神様も喜んでらっしゃるで」

世話役が答える。

「今度は、そろそろわしが入らんけばならんかと思うとったで」

源さんが言うと、世話役が笑った。

「バカなことを言うじゃないで。あんたには、まだまだがんばってもらわんとな」

「ま、もうちょっとやらんければな」

二人の老人は、ただ海を眺めた。

まもなく「喰祭」が終わろうとしていた。

今年の豊漁は間違いないだろう。